夢日記

「誰かくる」

kruchoro

誰かくる

　僕らはひとつの明かりもない部屋の中に隠れていた。ようやく暗闇に慣れた瞳で、まわりに誰かがいるということが僕にはぼんやりとわかった。

　小さな女の子が僕に寄り添って言う。

「誰かやってくる」

　耳をすませると、大人の足音がたしかに聞こえた。ブーツを履いているようで、床がその重みで軋んでいる。僕は彼女と同じくらいに小さかった。僕は怯えていた。からだが震えていた。

「寒いの？」

　もう一人の男の子（やはり僕らと同じくらいの背丈の小さな男の子）が言った。

　シッ！　僕は歯を食いしばるように口を横に開いて短く息を吐き出し、彼に注意した。男の子は、誤ってまた何か言ってしまわないようにと両手を口に当てた。

　彼女が彼のことを叱咤するように少しのあいだ睨んだ。彼はもっと申し訳なさそうな表情を顔の上半分でした（下半分は彼の両手で隠れていた）。

　足音は僕らのいる部屋に近付きつつあった。足音は最初に耳にしたときよりもずっと大きくなっている。

「誰かくる」

　僕らは三人で抱き合ってひとつにまとまった。隣の人の温度がこちらにもつたってくる。

「誰かくる」

　僕らはお互いの耳元で囁き励ましあった。男の子と女の子、二人の生温かい息と声が僕の耳の奥に当たっていた。

YOUTUBEとBLOGを宣伝するためのページ

YOUTUBE：https://www.youtube.com/user/kruchoro
→洋楽、邦楽のカバー動画をあげている。

天然ぱーま **BLOG**：http://kruchoro.blog.jp/
→小説、エッセイ、実験的な文章を書いている。

誰かくる：http://p.booklog.jp/book/95443

著者について：http://p.booklog.jp/users/krukruchorochoro/profile

コメント：http://p.booklog.jp/book/95443

作品が気に入ったので本棚へ：http://booklog.jp/item/3/95443